

第3回検討委員会での委員意見まとめ（検討テーマ順）

令和4年1月27日

学校・家庭・地域の協働体制検討委員会

資料2

- 【検討テーマ①】 これからの学校が子どものために大切にしていきたい機能は
- 【検討テーマ②】 子どもの学びや体験活動を充実させるために何が必要か
- 【検討テーマ③】 立場が異なる関係者のベクトル合わせ、ゴール共有の仕組みや方法は
- 【検討テーマ④】 負担の軽減と主体的な参画を促すきっかけづくり（単発で、気軽に、得意分野で）
- 【横断的テーマ】 これら全体を実現（達成）するための仕組みづくり

検討テーマとの主な関連					意見の性質			内容	発言分野
①	②	③	④	全体 仕組み	現状	課題	方向性		
●					●			学校は学力を高める、仲間と関わる、社会性などを身に付ける場。子どもたちに関わり、こうした力を育むのが教師の中心となる仕事。	学校の専門性
●					●			イギリスでは部活動はボランティアが担う。部活動は教員の本分ではないという考え方。	学校の専門性
●					●			諸外国と比較すると、日本の教員は授業数が少ない。その分日本では教員が部活動や事務的な仕事を担っている。	学校の専門性
●					●			教員の専門性である授業や教材研究、子どもとの関りの時間が保障されることで、教員が忙しさに喜びを見出せる部分もある。	学校の専門性
●					●			学校では市からの調査だけで年間200件、〇〇教育と呼ばれるものは30件近くあり、すべてに应付していたら当然パンクしてしまう。	教員の多忙化
●					●			タイムレコーダーの導入などにより、教員自身も勤務時間を意識するようになってきていると感じる。	教員の多忙化
●					●			多忙化が全て解消されるわけではないが、市では予算の範囲で市講師や専門職など学校への人的支援を行っている。	教員の多忙化
●					●			長期宿泊行事が、武蔵野市の教員になるハードルを上げていると聞いたことがある。多忙の要因になっていることはないか。	教員の多忙化
●						●		教員の勤務時間は増えているが、授業準備の時間はなくなっている。	学校の専門性
●						●		子どもの多様性を踏まえて授業を行うには、その準備に時間を割く必要があるが、他の業務でそれができないのであれば本末転倒。	学校の専門性
●						●		日本の学校では海外に比べて学校行事が多いという特徴がある。教育をおろそかにしてまで守るべきものかという議論は必要。	学校の専門性
●						●		教育現場では、工場のように分担することや、良いとされていることをスクラップすることの難しさがある。	学校の専門性
●						●		学校の忙しさの根本が何なのか、地域からは見えない。	教員の多忙化
●						●		学校の忙しさの原因について、現状の業務分析が必要ではないか。	教員の多忙化
●						●		1クラスあたりの在籍児童数の見直しや、教員を2名配置するなどの工夫で、学校の多忙は解消できないか。	教員の多忙化
●							●	学校行事のやり方や担い手について検討する際にも、教育的な意義や理念は大事にしていきたい。	学校の専門性
●							●	武蔵野市の理念や学校のビジョンに基づいて、学校行事も取捨選択できると良いのではないか。	学校の専門性
●							●	学校の事務的なことはどんどん減らして、1人1人の子どもたちをよく見てもらいたい。	学校の専門性
●							●	学校行事を全面的に減らすということではなく、行事を通じた先生と子どもたちの触れ合いも大事にして欲しい。	学校の専門性
●							●	教員は日中は子どもたちの対応に追われている。時間を効率的に使うためにはオンラインの活用も有効。	教員の多忙化
●							●	学校が担う業務を「減らす」ことは出来なくても、地域の特色も踏まえながら「選ぶ」必要があるのではないか。	教員の多忙化
●							●	連携・協働の成果をモデル的に検証する場合、子どもがどうなったかと同時に教員がどうだったかを評価できると良いのではないか。	教員の多忙化
●							●	教員を対象としたアンケートなどがあれば、そのデータの分析によって、忙しさを構造化できると良いのではないか。	教員の多忙化
●							●	子どもへの支援を目的とした事業であっても、教員への支援という視点も踏まえて見直ししていけると良いのではないか。	教員の多忙化
●							●	学校の業務を分けることや減らすことよりも、教員をサポートするような支援策を考えていく方が現実的ではないか。	教員の多忙化
●							●	ポジティブディバンスという考え方。ワークライフバランスがうまく保たれている先生は何をしているのかというアプローチ。	教員の多忙化
●							●	子どもを管理することに時間を使っていないか。学校の決まりを減らして、子どもが自立して動けるような仕組みがあると良いのでは。	教員の多忙化
●							●	協力者リストの充実も必要だが、まずは教員の負担を下げ、こうした資源を活用するための余裕を生む必要がある。	教員の多忙化
●							●	教員の働きがいも大事。新しいことや大変なことを乗り越える、評価されることによる充実感もある。	教員のやりがい
●							●	先生方の働きがい、やりがいという視点も、ワークエンゲージメント確保のためには重要。	教員のやりがい
●							●	部活動にやりがいを感じている教員もいる。ただ取り上げるのではなく、そういった気持ちも大事にしたい。	教員のやりがい
●							●	子どもたちも巻き込みながら、一緒に議論できる場があっても良いのではないか。	子どもの権利
●							●	対象となる子どもの年齢や発達に応じた関わり方という視点も必要。	子どもの発達
●				●			●	担い手を地域に移行する場合には、制度的または金銭的な保障が必要。	協働の仕組み
●				●			●	学校の業務を減らすだけでなく、地域等に移行することでよりさらに充実させるような体制づくりが必要ではないか。	協働の仕組み
	●				●			学校に求められる役割が増えるなか、職場体験などは、地域コーディネーターの支援が教育活動にうまく繋がっている事例。	地域コーディネーター
	●			●			●	地域の実情に応じて地域コーディネーターを複数体制にできるような、柔軟な対応ができると良い。	地域コーディネーター
	●			●			●	学校・家庭・地域はトライアングルではなく、学校がハブになっていないか。地域と家庭が繋がると強力なトライアングルになるのでは。	協働の仕組み
		●			●			地域行事への学校（教員）の協力について、突然手を引かれてしまうと地域側も慌ててしまう。	連携・協働
		●			●			学校と地域が協働していく際に、地域側に学校を忙しくしている要因がないか、気にかかっている。	連携・協働
		●					●	学校からの情報発信を待つだけでなく、お互いに意見表明できる機会があると良い。	情報発信・共有
		●		●			●	学校・家庭・地域のベクトルを合わせるには、どんな子どもを育てたいのか、どんな地域にしていきたいのか、じっくり話をする必要がある。	情報発信・共有
		●		●			●	学校、家庭、地域の方向性を合わせながら進めることが必要で、方向性を合わせる場が必要である。	協働の仕組み
		●		●			●	地域全体で子どもを育てるという、気持ちや責任感を共有していけるような制度的な仕組みが必要ではないか。	協働の仕組み
		●		●			●	必要なのは関係者全員が同じ価値観に染まることではなく、お互いの状況を理解しながら、何ができるかをすり合わせていく仕組み。	協働の仕組み
		●		●			●	学校・家庭・地域がお互いの状況を理解し合う場として「開かれた学校づくり協議会」の機能や運用を考えていく必要があるのでは。	協働の仕組み
		●		●			●	学校・家庭・地域の三者が優劣なく、同等のレベルに立ちながらお互いを尊重することが、率直な議論、信頼にもつながる。	協働の仕組み
			●		●			おやじの会が学校から引き受けた運動会でのライン引きなどの活動がきっかけとなり、他の地域活動に広がっている人もいる。	きっかけ
			●		●			何を手伝ったらよいのか、学校からの話があれば、地域としては協力しやすい。	協力者の確保
			●		●			手伝って欲しいことについて学校から依頼があれば、協力したいと思っている人はたくさんいる。	協力者の確保
			●		●			あそべえが立ち上がる際にも、協力いただける地域の方の名簿を作って活用していた。	協力者の確保
			●		●			授業への協力など、以前は学校から直接依頼されることもあったが、今は地域コーディネーターから依頼を受けることが多い。	協力者の確保
			●		●			学校としては協力者リストの登録者に声を掛けるよりも、信頼できる地域コーディネーターからの紹介を優先してしまう。	協力者の確保
			●			●		より多くの方に協力者として登録してもらうためには、広報と登録のしやすさが重要ではないか。	協力者の確保
			●			●		協力依頼が直前だと、協力者が見つかりにくい。長期的な計画があれば、あらかじめリスト登録者等に声を掛けておくこともできる。	協力者の確保
			●			●		教師がルールを敷くのではなく、子どもの興味や関心に応じた教育活動を行うために、依頼が直前になってしまう場合がある。	協力者の確保
			●				●	ボランティアは楽しくなければ続かない。楽しさを見出せる部分をお願いできる仕組みが必要ではないか。	協力者の確保
			●				●	誰も主体的に関わる人がいないような内容のものは、仕事として担ってもらう必要があるのではないか。	協力者の確保
			●				●	教育活動への協力を依頼する際に呼びかけ方の工夫は必要。「義務的」ではなく「特技を活かす」視点での呼びかけが良いのでは。	協力者の確保
			●				●	協力者リストには学校のニーズを反映できるとありがたい。また、大学や企業とも連携していけると良い。	協力者の確保
			●	●			●	ボランティア活動に大事なのは感謝の気持ち。お互いの感謝の気持ちが伝わる仕組みができると良い。	協働の仕組み
			●	●			●	地域性にも配慮しつつ、連携などの好事例を他の地域に広げられるような仕組みも検討していく必要があるのではないか。	協働の仕組み
			●	●			●	地域の活動もICTの活用により負担を軽減するなど、担い手を確保するためには参加しやすい環境を整えることも必要ではないか。	協働の仕組み
			●	●			●	協力者を集める仕組み（きっかけ作りとストック）と、学校のニーズとマッチングする仕組みが必要。	協働の仕組み
			●	●			●	連協・協働を継続していくには、参加した方にとって楽しかったり、意義があったりする仕組みであることが必要である。	協働の仕組み
			●	●			●	前向きな仕組みには「面白い・楽しい・嬉しい・またやりたい」という気持ちを、関わった人たちがどの程度味わえるかが重要。	協働の仕組み